①―市民の主体性と連帯

2. 市民の一体感

●横浜の市民意識は

「ふつう横浜で〝西口〟というと横浜駅西口を意味するでしょう。しかし僕の住んでいる近隣では知らない人が多いのです。どこか渋谷か新宿あたりだと思う人がいます。通勤、通学も都内へ、買物、レジャーも都内へ行き、およそ横浜市民でも〝西口〟に行かなくても何でも済んでしまうのです。県民ホールや大通り公園へも行ったことがなかったり、知らない人が大半です。このような人が本当に開港以来栄えてきた横浜の住民でしょうか。」

これは港北区（田園都市線沿線）に住む一人の学生からの「市長への手紙」の一節である。横浜といってもその市域は広く、市民の生活や意識も多様である。一時、「横浜都民」という言葉が使われたが、現在でもこの状況は変わっていないようである。横浜のような大都市で市民の一体感をつくっていくことは可能だろうか。また、そのためにはどんな方法が考えられるだろうか。

緑区役所では区の事業の一つとして五四年度から五七年度まで「文明開化とナイター観戦事業」という試みを続けた。緑区の区民に、親子で横浜の中心部を訪れ、横浜港、港の見える丘公園などを見てもらい、夜は横浜スタジアムで横浜大洋ホエールズのナイターを観戦してもらおうというものである。

この事業の目的は、とかく東京に目が向きがちな区民に、実際に横浜の都心の良さや地元球団の野球試合を見る機会を提供することにより、横浜市民としての意識を持ってもらうためのきっかけづくりである。

参加希望者も多く、毎回抽選で決定するような状況であり、参加者からも好評であった。

●市域の一体性の確立

行政がこのような事業を行うことについては議論があるかもしれないが、市民の意識づくりのための一つの試みとしては評価されるだろう。確かに周辺区、とくに港北区や緑区の市民にとっては横浜の都心へ向かう交通機関も十分に整備されていない状況であり、横浜都心部を訪れるための物理的・心理的障壁は非常に大きいといえよう。

この行事の参加者からも、「横浜にも、このような素晴らしさがあったのか。」という声が聞かれるように、実際に〝横浜〟に肌でふれてもらうことには大きな意味がある。

横浜の都心と郊外、また市内の各地域を効率的に結び、それによって市民の日常生活のなかで〝横浜〟のウェイトが高まってくること、これが横浜の都市としてのまとまり、市民意識の高まりをつくっていくための前提条件であろう。現在、戸塚区、港北区などで進められている地下鉄の整備もこのための重要な施策である。また、幹線道路の整備も急がなければならない。

●求められる新たな魅力

市民としての意識は、それぞれの市民が住んでいる地域に愛着を持つことから始まる。市が五四年に行った「横浜市民の定住意識に関する調査」では市民の約八〇%が〝浜っ子意識〟を持っていると答えている。そして、その比率は現在の居住地に居住している期間が長くなるにつれて多くなっているようである。その意味では地域の生活環境を整備し、地域での市民の活動を活発化させていくことが横浜市民としての意識を高めるための基礎的な条件であると思われる。また、市内の各地区が持っている海、丘、川といった自然的特徴や、古代から現代にいたる歴史的資産など、各地区の特性を生かし、それぞれの魅力を持った街づくりを行っていくことが必要である。

広い市域と多様な市民を持つ横浜にとって、これまでの〝港ヨコハマ〟に加え、新たに横浜の魅力となるべきものが求められている。都心や周辺地区に象徴的な施設の建設を進めるのはこのためである。このような試みが次々と生まれてくるなかから、新たな市民の連帯意識も培われ、市域および市民意識の一体化が進むであろう。

緑区では市民の一体感を高めていくため、「文明開化とナイター観戦事業」を行った

市域の一体性の確立をめざして、地下鉄の整備も進んでいる